

重度の肥満男子で心臓血管代謝系リスクが上昇

近年、小児や若年成人の重度肥満の有病率が上昇しているが、この年齢層の心臓血管代謝系のリスク因子の保有状況はよく知られていない。そこで本研究では、小児・若年成人における肥満の重症度と心臓血管代謝系のリスク因子との関連を評価した。

1999年～2012年の全米栄養健康調査のデータから、肥満指数（BMI）が85パーセンタイル以上の3～19歳の過体重または肥満の小児・若年成人8,579例を横断的に解析し、肥満の重症度別に心臓血管代謝系リスク因子の保有率を評価した。米国疾病予防管理センター（CDC）の成長曲線に基づく年齢別・性別のBMIのパーセンタイルに従って、過体重、クラスⅠ肥満、クラスⅡ肥満、クラスⅢ肥満に分類したところ、内訳はそれぞれ46.9%、36.4%、11.9%、4.8%となった。分析の結果、わずかな例外を除き、心臓血管代謝系の変量の平均値は男女とも肥満の重症度が高くなるほど高く、数値は男子が女子よりも高かった。また、HDLコレステロール値は肥満の重症度が高いほど低かった。年齢・人種や民族・性別で補正した解析では、クラスⅠ肥満に比べてクラスⅢ肥満においては、HDLコレステロール低値、収縮期/拡張期血圧高値、トリグリセリド高値、HbA1c高値のリスクが高かった。

したがって、小児および若年成人では、重度の肥満は心臓血管代謝系のリスク因子の保有率を上昇させ、とくに男子でその傾向が強いことが示された。

出典：New England Journal of Medicine. 2015; 373(14): 1307-1317